

市立函館博物館

研究紀要

第18号

2008

序

ここに『市立函館博物館研究紀要』第18号を刊行いたします。

本号は、稚内水産試験場の川井唯史氏と中田和義氏による「ニホンザリガニの博物館的知見Ⅲ」と当館館長、長谷部一弘による「函館、ウラジオストクの新たな交流」の2題を掲載いたしました。

川井唯史氏と中田和義氏による「ニホンザリガニの博物館的知見Ⅲ」は、函館とその周辺に生息していたザリガニと、人間との関わりを検討したものです。ニホンザリガニは、北海道と東北北部に生息しておりますが、過剰な採取によって生息個体数が減少し、現在希少種となつてしまいました。川井・中田両氏は、博物館や図書館に保管されている資料や物証に基づいて、生息分布域におけるニホンザリガニの名称や利用方法、産物としての位置づけ検証しながら人間との関わりを考証しています。本論考では、北海道大学図書館と当館を代表する博物館史資料の一つである「明治二十六年四月 函館水産陳列場列品目録」等を根拠に、歴史的な位置づけを行っております。また、それらを裏付けるために、現在の生息域の踏査と採取調査を行い、その結果も合わせて掲載されています。

当館館長、長谷部一弘による「函館、ウラジオストクの新たな交流」は、2002年7月28日に当館と姉妹博物館の調印をしたロシア、沿海地方国立アルセニエフ博物館との5年間にわたる交流の軌跡と将来あるべき姿について示されています。

沿海地方国立アルセニエフ博物館は、1884年沿海州地域学協会の博物館として創設され、現在ウラジオストク市内に3つの分館と沿海地方にある6つの支部博物館を、調整・管理する沿海地方最大の学術・文化センターの役割を担う総合博物館であり、他方、1879年に開場した開拓使函館仮博物場を前身とする市立函館博物館は、日本における地方博物館として草分け的な存在です。この両博物館の提携は函館市とウラジオストク市の友好関係を進めるものに止まらず、北東アジアを視野に入れた幅広い博物館活動の可能性を探る、大きな可能性が示唆されております。

結びになりますが、当研究紀要の発行にあたりご協力を頂戴した関係各位には深謝いたしますとともに、今後ともご指導等賜りますようお願い申し上げます。

平成20年3月31日

市立函館博物館

目次

序

ニホンザリガニの博物館的知見Ⅲ

川井 唯史・中田 和義・・・・・・・・・・ 1

函館、ウラジオストクの新たな交流

長谷部 一弘・・・・・・・・・・ 11

ニホンザリガニの博物学的知見Ⅲ

—函館市周辺における情報—

川井 唯史・中田 和義

ザリガニ類は一生を淡水で過ごす甲殻類の仲間である。ニホンザリガニ*Cambaroides japonicus*は、北海道全域と東北の北部に分布する在来種で、稀少種である(Kawai and Fitzpatrick, 2004)。また北米からの移入種ウチダザリガニ*Pacifastacus leniusculus*とアメリカザリガニ*Procambarus clarkii*も北海道での分布が確認されている(Nakata, et al, 2005)。

本稿では博物館と図書館に保管されているザリガニ類の史料や物証を探し、人間との係りを検討した。特に、函館とその周辺におけるニホンザリガニの名称、利用、産物としての位置付けに関して注目した。その他にもアイヌとの関係、ウチダザリガニとアメリカザリガニについての知見も収集した。

調査方法

I 文献情報

2006～2007年に、北海道大学附属図書館で以下の史料を調査し、名称、利用、産物としての位置付けの情報をまとめた。

- ・『明治九年・十四年御巡幸記』(請求記号道写本 102、書誌 I D0A011590000000)。
- ・『蝦夷みやげ』(請求記号旧記 0202、書誌 I D022290000002)。※なおアイヌ語は、原文の表記に従って書いた。

II 函館のザリガニの史料と現地調査

(市立函館博物館)

2007年に市立函館博物館にて所蔵史料と建築物に関する情報を集めた。また北海道大学附属図書館北方資料室にて以下の史料を調査した。

- ・『函館水産陳列館(第1号館)』『函館水産陳列館(第2号館)』(請求記号 E(a)56-1 と E(a)56-2、書誌 I D016460000000)。

(谷地頭地区生息地)

市立函館博物館で得た情報を補足するために、2007年12月1日に博物館に近接する函館市谷地頭地区にて踏査とニホンザリガニの採集を行った。なおニホンザリガニは稀少種であり、生息地が明らかになることで採集行為が入り、過剰な採集によって個体群が消失することも危惧される。そのため生息地の名称や外観に関する情報を示さなかった。

Ⅲ 北海道大学博物館分館

2006年、函館市にある北海道大学総合博物館分館に保管されているザリガニ類の標本を観察した。標本は眼窩頭胸甲長（眼窩後縁から正中線の頭胸甲後縁）を測定し、外部生殖器官の形態で雌雄を判別し、性別に個体数を記録した。またラベル情報を記録した。

Ⅳ 大沼駒ヶ岳神社

2006年、北海道南部七飯町に位置する大沼湖畔の大沼駒ヶ岳神社にて、ニホンザリガニの伝説に関する情報を集めた。また同年10月には七飯町にて聞き取り調査を行った。

結果と考察

I 文献情報

（名称、利用、産物としての位置付け）

・『明治九年、同十四年御巡幸記』

明治天皇が明治9年（1876年）に北海道南部に位置する函館と七飯を行幸された際の記録を北海道庁嘱託の河野常吉がまとめたものである。河野常吉とは文久2年（1861年）、現在の長野県松本市に生れ、慶応義塾大学で学び、広い範囲の知見を有する学問家で、明治27年（1894年）に北海道庁の嘱託となり、明治44年には函館区史を作成したのに続き、北海道史、小樽市史、室蘭市史編纂の主任を勤めた（石井、1998；河野、1974）。

「北海道史編纂用」罫紙に毛筆で書かれ、7月16日の御行幸に際して、函館ではニホンザリガニが各種の海産物と共に供されたことが書かれており、その名称は「オクリカンキリサルカニといふ」とされている（図1-A）。御行幸には当該地域の高級品を供していたことが考えられる。そのため、ニホンザリガニは当時、函館では高級品であり、また明治初期の北海道南部でのニホンザリガニの名称が「サルカニ」であったと考えられる。なお「オクリカンキリ」とはザリガニ類の胃石の名称であり、胃石とはザリガニ類の脱皮時に胃中に形成される白色の結石のことである。江戸時代当時、オクリカンキリは薬品として利用されていた（山口、2001）。本標記からニホンザリガニは、当時は薬品、高級品として利用されていたことが伺える。

・『蝦夷みやげ』

『蝦夷みやげ』（下）（図1-B）は明治33年（1900年）に北海道の函館で発行され、「無名氏著」とされている。そして校閲は石川鴻齋が行っている。なお石川氏とは、明治の詩文家、また南方の画家として有名であり、寛政年間（1790年代頃）に函館に来遊しており、その時に「書肆魁文舎」の依頼に応じて校閲しているので、蝦夷みやげに描かれた絵は、この人物の作品である可能性が指摘されている（高倉、1987）。石川は北海道の生物に関する知見を函館で得ていた可能性もある。しかし、オリジナルが『蝦夷島奇観』とされており（高倉、1987）、添付されている図が類似する。

『蝦夷みやげ』の巻末には「蝦夷に産する珍しい動物」が紹介されており、27ページにはニホンザリガニが描写され、添付された名称は「おくりかんきり」「ざりがに」とされており、当時の函館地方における名称が明らかになった。また、ニホンザリガニは当時、北海道の珍しい産物として扱われていたものと思われる。

『明治九年、同十四年御巡幸記』と『蝦夷みやげ』におけるニホンザリガニの名称、産物としての位置付けを比較・検討した。名称に関しては、北海道南部では少なくとも「サルカニ」「ざりがに」の二つがあり、文字単位の差異であり、細部に違いが見られる。また産物としての位置付けは両史料で共通しており、前史料は高級品として扱われたと思われ、後史料も珍しい産物として位置付けられている。そのため明治時代に北海道南部でニホンザリガニは貴重な高級品として位置付けられていたと考えられる。

(アイヌとの関係)

SPb-アイヌプロジェクト調査団(1998)には、MAE 839 39、和訳「ザリガニのはさみ(お守り)」、英訳「crab claw (talisman)」、採集地「北海道」、資料説明「爪の先端部」、寸法「L7.5 W15.0 T5.1」が、ロシアのサンクトペテルスブルグにあるロシア科学アカデミー人類学民族学博物館(MAE)で1995~1996年に行われた調査で観察されている。写真によると、右鉗脚が使われており、形態は強力で棘が良く発達することからハナサキガニ *Paralithodes brevipes* かタラバガニ *P. camtschaticus* とと思われる。そのため、ここではニホンザリガニと大型のカニ類が混同しているものと思われる。なおハナサキガニやタラバガニは一对の鉗脚を持つが、通常、右側が大型化し(上田ら、2003)、お守りは大型の方を使ったことになる。そしてハナサキガニのアイヌ語はフレアンパヤヤで、タラバガニはホテンテムアンパヤヤである(上田ら、2003)。

アイヌからの聞き取り調査によると、ニホンザリガニのアイヌ語は多様であるが、テクンベコルカムイやホロカレイエツプが多く見られる(川井・鬼丸、2007)。しかし、中にはニホンザリガニをアムパヤヤと呼ぶ方が居た(例えば北海道教育庁教育部文化編、1992)。そのためアイヌの中にはニホンザリガニとタラバガニを明瞭に区別をしていなかった方も存在していた可能性がある。この考えと直接関係しないが、参考になる情報として、吉田(1959)が1920年に釧路市春採のサヌキマチさんから聞き取った一つの伝承には、テクンベコルカムイ(ニホンザリガニ)は鉄製口琴の由来となり、タラバガニ(アムパヤヤ)は三味線の由来とされている。

II 函館のザリガニの史料と現地調査

(市立函館博物館)

『明治二十六年四月 水産陳列場列品目録 水産陳列場』を始めとした10綴の資料が見つかった(表1)。年代が最も古い明治26年(1893年)の目録(図2-A)には以下の4品が記述されていた。「一 さりがに 壺瓶 磯谷郡尻別川 明治一十九年六月」、その左に「一 さりがに 全 亀田郡大野村 全十二年四月」、同様に「一 乾 さりがに 壺個 函館谷地頭 全十三年五月」、同様に「一 オクリカンキリ 壺瓶 亀田郡大野村 全十二年二月」(図2-B)。同様に大正、昭和時代の目録が続いており、昭和7年の目録の表紙と記述を示した(図2-C、D)。

ここで上記の目録を評価するにあたり必要な「水産陳列場」に関する歴史を紹介する。この歴史は函館市史編さん室(1990)を参考にした。明治12年(1879年)、開拓使函館支庁が集めた物品を展示するため函館仮博物館が開場した。明治15年(1882年)に開拓使が廃止され函館県が設置されることで管理主体が変わり、館の名称は、函館県博物館となる。明治17年(1884年)に函館県第二博物館が開場し、函館県博物館の名称は函館博物館第一館となる。明治19年

(1886年)北海道庁に移管し、明治24年(1891年)に函館県第二博物場が庁立の商業陳列場となり、また新しく庁立水産陳列場が開場した。明治25年(1892年)、函館博物場第一館は庁立の商品陳列場となる。明治28年(1895年)、二つの商品陳列場は函館区に払い下げられ水産陳列場と合わせて区立の函館水産陳列場が合計3館となる。明治34年(1901年)に第三館は廃止・解体されるが、昭和7年(1932年)に函館水産陳列場第一館に水産館の看板が掲げられる。

北海道大学の所蔵品として『函館水産陳列館(第1号館)』『函館水産陳列館(第2号館)』の写真がある(図3-A、B)。なお撮影された年代に関して、史料に添付していた原文のままの情報としては、「大正期?」との記述がある。両館は、昭和38年(1963年)7月26日に北海道指定有形文化財に指定されている。そして現在も当時の姿を止めたまま保存されている(図3-C、D)。ただし標本等の収蔵や展示は無い。

以上の歴史も参考にして目録の記述に関して考察する。明治時代の目録(図2-A、B)は管理者が道庁時代のものであり、昭和7年の目録(図2-C、D)は新しく水産館の看板が掲げられ新規開館した当時のものであると考えられる。そのため、各目録は時代により名称は異なっているが、同じ館の目録であり、その陳列品も同様と判断してよい。

明治時代の目録はニホンザリガニの名称が「さりかに」、そして胃石の名称は「オクリカンキリ」となっており(表1)、北海道南部では明治時代(1893年当時)に両名称が使われていたと考えられる。これが39年後の昭和7年(1932年)の目録では名称が「ざりかに」と「ざりかきの眞珠」に変化している(表1)。前者の変化は濁点のみで軽微であるが、後者の変化は欧州から導入した言葉(山口、2001)から漢字と大きい。

ニホンザリガニが水産陳列場の目録にあったため、少なくとも1893~1932年頃は本種が水産物として扱われていたことを示している。そして1906年に函館市の市場で販売されていたニホンザリガニの標本はスミソニアン博物館に保管されており(川井、2006)、このことは本種が水産物として扱われていたことを支持している。

年	西暦	標題	ニホンザリガニの名称	胃石の名称	備考
?	?	明治十一年~大正十一年 列品目録水産陳列場	ざりがに、さりかに	さりかに眞珠	
?	?	水産陳列場重要書類 第二係 勸業分掌	ざりがに	オクリカンキリ	
?	?	北海道廳物品従前ヨリ備置之部	ざりがに	オクリカンキリ	水産陳列場重要書類 第二係 勸業分掌に綴られていた
明治26	1893	水産陳列場列品目録 水産陳列場	ざりがに	オクリカンキリ	
大正4	1915	水産陳列場 列品目録 水産陳列場 勸業係	さりかに	ざりがにのしんじゅ	第九號戸棚(七巻八点)と書かれている
大正11	1922	陳列品目録 水産陳列場	さりかに	ざりがにノ眞珠	
大正15	1926	類典 水産陳列場事務所	ざりかに	ざりかきの眞珠	
昭和7	1932	函館水産館陳列目録 函館水産館	ざりがに	ざりがきの眞珠	
昭和23	1948	水産館蔵品引継目録 市立博物館	ざりかに	ざりかきの眞珠	
昭和30	1955	自然科学部水産動物資料目録 市立函館博物館	ざりがに	ざりがきの眞珠	博物館相等施設指定申請書関係書類に綴られていた

表 1 市立函館博物館に所蔵されていた水産陳列場の列品目録

(谷地頭地区生息地)

谷地頭地区の現地調査の結果、ニホンザリガニの雌2個体が採集され現在でも個体群が維持

されていることが確かめられた。このことから函館は明治時代以前における、その分布を示す物証や記録があり、しかも現在でも生息域が現存している。なお現在、ニホンザリガニは各行政機関により希少な種として位置付けられている（例えば環境省自然保護局野生生物課編、2000）。そのため、谷地頭地区は古くからの記録が残った現存生息地として貴重であり、今後の保全が望まれる。

ニホンザリガニが希少種として指定された理由としては、過去に広く生息が見られていたが近年急速に生息域や生息密度が低下したことにある。しかし年代を伴った分布情報は殆ど見られない。函館では1893～1955年にはニホンザリガニが水産物としての扱いを受けており、このことは当時本種が豊富に生息していたことの傍証となる。そのため函館では、明治時代から昭和初期にかけてニホンザリガニが水産物として販売するほど豊富にあったとの生息情報を有しており、この例は珍しく貴重である。

Ⅲ 北海道大学総合博物館分館

ウチダザリガニとアメリカザリガニが各1ロット所蔵されていた(図4)。ウチダザリガニは乾燥していたが、頭胸甲長34.59mmの雄1個体が保管されていた。ラベル情報を原文のまま示すと「1960. 6. 17」*Astacus trowbridgii* Stimpson ウチダザリガニ、アメリカザリガニは液浸で、ラベルは「*Procambarus clarki* (GIRARD) アメリカザリガニ 昭和47年夏 函館市販」であった。昭和47年は1972年である。アメリカザリガニの学名は正確には*Procambarus clarkii*であるため、その記述は修正が必要である。大きさに関する情報としては以下の通りであり、5個体が収容され、雄の頭胸甲長40.81mm、雄38.45mm、雄37.35mm、雄17.33mm、雌40.99mm。北海道でこれまで採集されたアメリカザリガニ標本で最も古いものは、国立科学博物館に保管されている1987年採集の標本(NSMT-14217)である(Kawai and Kobayashi, 2006)。北海道におけるアメリカザリガニ個体群の由来は、本州産の市販されていた個体が人為的に放流されたものと思われるが、本調査によって少なくとも1972年にはアメリカザリガニが北海道内で市販されていたことが明らかになった。そして、1987年に北海道で最も古いアメリカザリガニの標本が採集される、その以前に、本種が北海道内で市販されていた事実には整合性がある。

Ⅳ 大沼駒ヶ岳神社

神社の入り口には鳥居があり(図5-A)、ここを奥に進むと看板があった(図5-B)、この看板の標記として、標題は「駒ヶ岳神社の由来」で、作成年は平成4年(1992年)8月で、作成協力者は梶義蔵ほか有志一同・七飯町商工観光課・大沼観光協会であった。看板には「ザリ蟹の生息に適した湧水があり、古来から長寿の霊水として珍重され」と書かれている(図5-C)。2006年に、看板を作成した関係者に対して行った聞き取り調査の結果として、看板の設立から10年以上を経過していることもあり、看板に記述してある以上の情報は得られなかった。

七飯町史(七飯町編、1976)には、当町における伝説が合計21話記述されている。しかし、これらの中でニホンザリガニに関するものは無かった。また西田(1903)にも大沼に関する各種の伝説が書き記されているが、ニホンザリガニに関する情報は見られなかった。これらのことから、看板に記述されていた伝説を裏付ける情報は、見当たらなかった。

(稚内水産試験場・独立行政法人土木研究所)

謝 辞

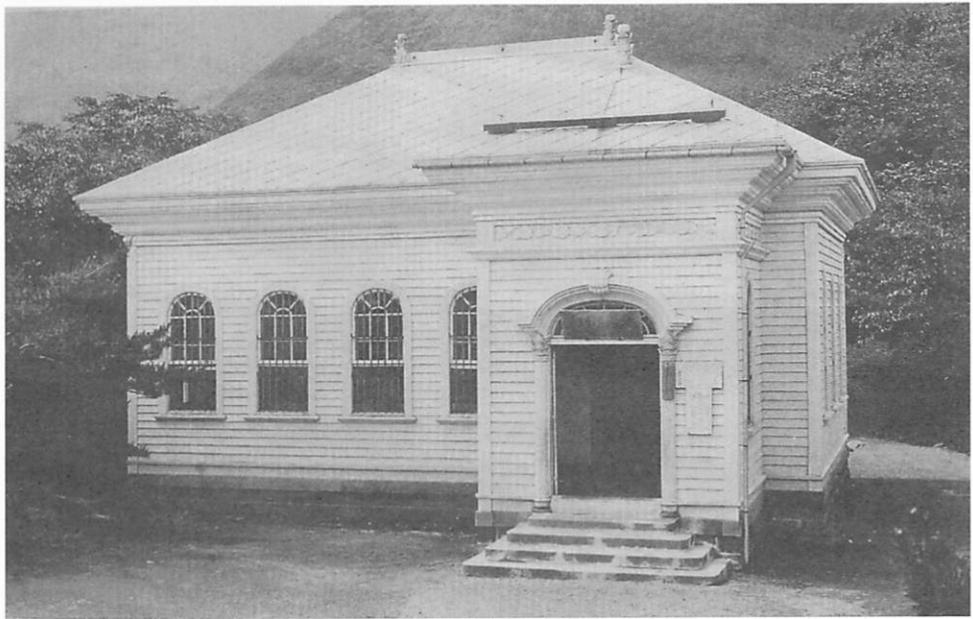
本研究に御理解を頂き、所蔵品の写真撮影と利用許可を頂いた、北海道大学附属図書館北方資料室、同大学院水産科学研究科の矢部衛教授、市立函館博物館、貴重な情報を頂いた七飯町商工観光課と大沼観光協会、調査にご協力下さった北海道大学大学院水産科学院の山名裕介・山崎友資の両氏に深謝します。

文 献

- 函館市史編さん室編, 1990. 函館市史通説編第2巻(博物館の設立). 函館, 函館, pp 1474-1478.
- 石井義典, 1998. 評伝 河野常吉. 北海道出版企画センター, 札幌, 472+14(解説) pp.
- 北海道教育庁教育部文化課編, 1992. 平成3年度アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査X I). 北海道教育委員会, 118 pp.
- 環境省自然保護局野生生物課編, 2000. レッドリスト昆虫類(環境省HPにて掲載).
- 川井唯史, 2006. ニホンザリガニと人間の関係. 生物科学, 57(2): 106-109.
- Kawai, T & J. F. Fitzpatrick, Jr., 2004. Redescription of *Cambaroides japonicus* (De Haan, 1841) (Crustacea: Decapoda: Cambaridae) with allocation of a type locality and month of collection of types. Proceedings of the Biological Society of Washington, 117: 23-34.
- Kawai, T., & Y. Kobayashi, 2006. Origin and current distribution of the alien crayfish, *Procambarus clarkii* (GIRARD, 1852) in Japan. Crustaceana, 78: 1143-1149.
- 川井唯史・鬼丸和幸, 2007. ニホンザリガニの博物誌的研究—地方名、アイヌとの関係、幕末の陶器、大正時代の宮内省への献上—美幌博物館研究報告印刷中
- 河野常吉, 1974. 河野常吉著作集 I 考古学・民族誌編. 北海道出版企画センター, 札幌, 304 pp.
- Nakata, K., K. Tsutsumi, T. Kawai, & S. Goshima, 2005. Coexistence of two North American invasive crayfish species, *Pacifastacus leniusculus* (Dana, 1852) and *Procambarus clarkii* (Girard, 1852) in Japan. Crustaceana, 78: 1389-1394.
- 七飯町編, 1976. 七飯町史. 七飯町, 七飯町, 1217pp.
- 西田季一郎, 1903. 北海道大楽園: 一名大沼案内. 敷島館, 8, 10, 44, 7, 14 pp (本に各種の資料を綴じ込んでいる)
- SPb-アイヌプロジェクト調査団(編著), 1998. ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録. 草風館, 東京, p. 80.
- 高倉新一郎, 1987. 挿絵に拾う北海道史. 北海道出版企画センター, 札幌, 299 pp.
- 上田吉幸・前田圭司・嶋田 宏・鷹見達也, 2003. 漁業生物図鑑 新北のさかなたち. 北海道新聞社, 札幌, 645 pp.
- 山口隆男, 2001. 「ファウナ・ヤポニカ」甲殻類編で参照された図譜「蟹蝦類写真」について. Calanus, 特別号Ⅲ: 157-179.
- 吉田 巖, 1959. 愛郷往来 帯広市社会教育叢書5, 東北海道アイヌ古事風土記録集(帯広市教育委員会編), 帯広市教育委員会, 85 pp.



A 『函館水産陳列館（第1号館）』北海道大学附属図書館北方資料室所蔵

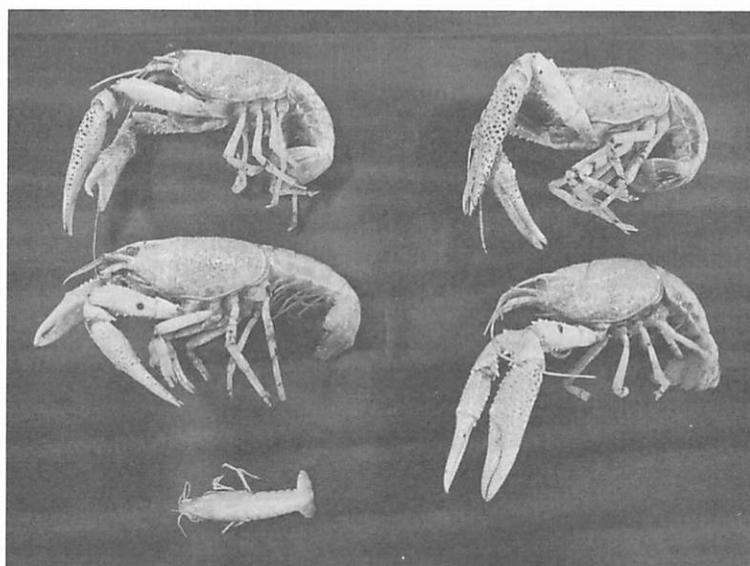


B 『函館水産陳列館（第2号館）』北海道大学附属図書館北方資料室所蔵



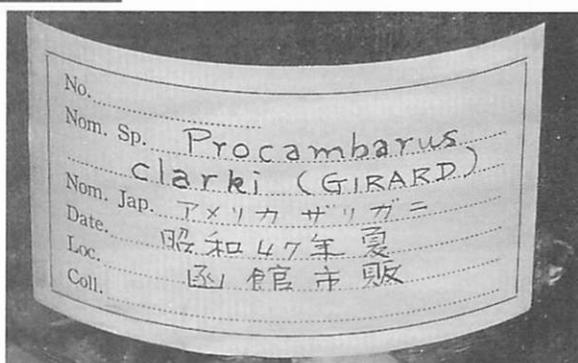
C 2007年現在の旧函館水産陳列場第1館

D 2007年現在の旧函館水産陳列場第2館



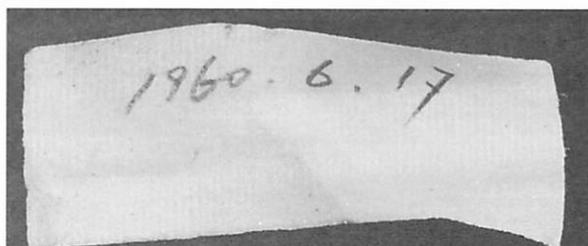
A アメリカザリガニ標本
北海道大学総合博物館分館所蔵

B アメリカザリガニ標本ラベル
北海道大学総合博物館分館所蔵
※「函館市販」と書かれている



C ウチダザリガニ標本
北海道大学総合博物館分館所蔵

D ウチダザリガニ標本ラベル
北海道大学総合博物館分館所蔵





A 大沼駒ヶ岳神社参道



B 駒ヶ岳神社の由来

※北海道南部に位置する
七飯町大沼湖畔にあった
大沼駒ヶ岳神社

ました。通り抜けたところには、ザリ蟹の生息に適した湧水があり、古来から長寿の霊水として珍重され、登山者の渴きを癒していただきます。又、この洞窟を

C 由来記部分

図-5

函館、ウラジオストクの新たな交流

－博物館交流、はじめの一步から5年－

長谷部 一弘

はじめに

2002年7月28日、函館市青少年研修センターにおいて、市立函館博物館と沿海地方国立アルセニエフ博物館との間で博物館姉妹交流の調印が行われた。この年は、函館市市制施行80周年を記念する年にもあたり、会場の研修センターでは、北海道・東北史研究会シンポジウム「日本の北方地域と北東アジア」の記念セレモニーとして盛大に執り行われ、シンポジウムに花を添えた。函館博物館にとって、123年の永きにわたる博物館の歴史の中で前身とする開拓使函館仮博物館の1879年5月25日開場以来、初めての海外博物館交流の始まりとなった。

博物館姉妹提携の調印では、これまでの函館市とウラジオストク市との歴史的な交流の経緯を踏まえ、両市市民および関係機関等との文化交流を今後一層推進していくための博物館相互交流の協力と発展を掲げ、博物館交流を媒体とした両市の歴史的文化的交流の推進を誓い合った。

姉妹博物館となった沿海地方国立アルセニエフ博物館の沿革について述べると、1884年、沿海州地域学協会の博物館として創設、1890年9月30日に、沿海州地域学協会の博物館として一般に開放された。法令により1925年にウラジオストク国家地方博物館、1939年に沿海地方地域学博物館と改称し、1945年9月4日には、政府の命により、探検家V. K. アルセニエフの業績をたたえ、沿海地方国立アルセニエフ博物館となった。現在のアルセニエフ博物館は、ウラジオストク市に在る国際展示センター、アルセニエフの家博物館、スハーノフの家博物館の3つの分館と沿海地方に在るダリネレーチェンスク市歴史博物館、パルチザンスク市歴史博物館、スバスク市歴史博物館、レンザヴォツク市歴史博物館、アルセニエフ市歴史博物館、チュグエフカ村文学書集館の6つの支部博物館を調整・管理する沿海地方最大の学術・文化センターの役割を担う総合博物館である。歴史、文化的記念物を中心に42万7千点の資料を収蔵し、ウラジオストク市民をはじめ広く内外の観光客や研究者等により、年間40万人以上の観覧者を集めている。

2007年7月28日、博物館姉妹提携の調印から5年が経過し、ひとつの節目を迎えた。以下に、これまでの博物館交流に関わる軌跡を辿りながら、これからの博物館交流について述べてみたい。

2002年、函館・ウラジオストクの博物館姉妹提携

－博物館交流、はじめの一步－

2002年7月28日、市立函館博物館と沿海地方国立アルセニエフ博物館との間において博物館姉妹提携が調印された。これは、函館市市制施行80周年記念、函館・ウラジオストク市姉妹都市提携10周年記念事業の一環として行われたものであったが、とりわけ北東アジアの両地

域における博物館を媒体とした新たな文化交流のかたちをめざす博物館交流のはじめの一步となった。

そもそもこの提携にいたる経緯を辿れば、「日本の中のロシアを求めて」の収録・取材のため、2002年2月中頃に来函したアルセニエフ博物館の研究者ルスナク・スベトラナ女史がアルセニエフ博物館とロシアとゆかりの深い函館の地に在る函館博物館との博物館交流を提案したことがきっかけであった。地域に根ざした博物館活動をめざしている函館博物館は、北東アジアを視野に入れた幅広い博物館活動の可能性を探るものとしてそれを受け入れたわけである。

調印書には、博物館交流の具体的な手だてとして、刊行物等の情報の交換、専門分野における共同研究、共同企画による展覧会、シンポジウム等の開催が盛り込まれ、両博物館が地域の中で実践可能なところから交流を図っていくことで合意した。アレクシク・ガリーナ館長と金山正智教育長との調印式に引き続き、「函館－ウラジオストク：歴史的関係と協力の展望」と題する姉妹提携記念講演でルスナク女史は、およそ150名の参加者を前に函館とウラジオストクにおけるこれまでの歴史的事実と今後の可能性を熱く述べた。

そして博物館姉妹提携の調印により、早速交流事業の第1回として2003年にウラジオストク市において開催される文化、芸術の祭典、第3回ウラジオストク・ビジュアル芸術ビエンナーレに参加し、博物館プログラムノミネートの展覧会「函館とウラジオストク－歴史的関係と協力の経験」を企画、開催することとなった。

2003年、博物館姉妹提携1周年

－ウラジオストクで函館を紹介する－

2003年7月1日から6日の1週間、アルセニエフ博物館を会場に多くのウラジオストク市民を集めて博物館姉妹提携1周年記念展覧会「函館とウラジオストク－歴史的関係と協力の経験」が盛大に開催された。「函館、ロシアの架け橋、その人々」、「函館、ウラジオストクとの出会い」、「目で見る今日の函館」で構成された展示内容は、函館から持参したジュラルミン製ケース2箱分の写真パネル、年表、書籍、観光ポスター、ビデオ映像、CD等の展示資料で満たされた。期間中の新聞報道等のインタビューでは、博物館交流の意義や展覧会の趣旨など初めて紹介された函館とウラジオストクとの歴史的関係や函館の街の素顔などに大きな興味と関心が寄せられた。また、展覧会開催期間中には、沿海地方に在る地方博物館を一堂に会した「博物館円卓会議」が開催され、文化の相互理解発展に向けた博物館、ギャラリーの役割や博物館と地域の関わりについて活発な討議がなされた。特別ゲストとして迎えられた私たちは、日本、函館における博物館と地域の関わりについての現状と課題について述べ、共通する地域における博物館の役割と可能性について語り合うなど有意義な情報交換の場を持つことが出来た。ちょうど、この年は、「ロシアにおける日本文化フェスティバル2003」にあたり、ロシア各地では多岐にわたる日本文化に触れる機会が設けられた。滞在期間中の沿海地方、日本などの周辺地域を取り込んだウラジオストク市あげての芸術、文化の祭典ビエンナーレでも、書道などの多彩な日本文化紹介のプログラムが組まれる中、博物館交流事業がそのひとつとしてノミネートされ参加できたことも大きな交流の成果となった。私が観た祭典ビエンナーレに沸いた1週間のウラジオストク市民と博物館との関わりあいは、博物館そのものが地域や市民と当たり前に向き合い、市民も

生活の一部として当たり前博物館を歩き来している光景であった。

2004年、函館における博物館交流

－函館でウラジオストクを紹介する－

博物館姉妹提携1周年記念事業「函館とウラジオストク」展の成果をもとに、2004年7月5日から7月11日の1週間、函館市芸術ホールにおいて企画展「ウラジオストクと函館」が開催され、函館市民にこれまでのウラジオストク市と函館市との歴史的、文化的交流やウラジオストク市の歴史、文化、姉妹博物館アルセニエフ博物館の歴史などを紹介した。言うまでもなく展覧会は、企画準備から展示に至るまでバプツェヴァ・イライダ主任研究員、クリメンコ・イライダ写真所蔵専門員をスタッフとしたアルセニエフ博物館と函館博物館との共同企画・展示によるものであった。

展示に関わる写真パネル、年表、解説パネル、キャプションなどの製作は、双方による資料のリストアップ、事実関係の確認、翻訳、画像処理、校正にいたるまで長距離間のファックス通信などにより詳細に協議、調整され、両博物館スタッフのほかに、双方の交流に関係する多くの人々や諸機関の協力によって執り行われた。展覧会の企画・開催にあたりバプツェヴァ、クリメンコ両女史のアルセニエフ博物館スタッフに加え、日本センター職員であるスマローコヴァ・オリガ女史が博物館交流に理解を示され快く翻訳や通訳の労をとって参加してくれたことは何よりも心強かった。また、来函した3名は、展覧会開催期間中、渡島、檜山地方の博物館や教育委員会で作る道南ブロック博物館等施設連絡協議会の研修会や市民を対象とした展示解説セミナーへの講師参加、ゴロヴニン幽閉の地松前探訪、函館日ロ交流史研究会例会での講話、情報交換等多岐にわたり交流を深めた。

3名の滞在期間中、アルセニエフ博物館では博物館姉妹提携の記念日にあたる7月28日から3ヶ月にわたり路面電車を使った移動博物館、つまり博物館電車が昼夜市街を駆けめぐるイベントを計画中であるとの情報を得た。車内には、昨年アルセニエフ博物館で使用した展覧会の写真パネルや年表、解説パネル、観光ポスターなどを掲げ、函館とウラジオストクの歴史的、文化的関わりがウラジオストク市民はじめ大勢の観光客の目に触れられるようだ。走る博物館路面電車の展示内容にも増して、路面電車という仕掛け装置によって博物館交流の意味やその可能性を地域市民に積極的に訴えていこうとする姿勢に共感するとともに博物館交流の成果が着実にウラジオストクで浸透しているように感じた。

昨年の展覧会終了後、函館博物館で用意した120枚程の展示パネル類をすべてアルセニエフ博物館に寄贈した。博物館路面電車のホットな話題を耳にした時ふと、その好意に応えるかのようにアレクシク館長が、『いただいた貴重な写真パネルを沿海地方に在るすべての地方博物館の巡回展で、多くの地域の人々にも是非紹介したい』と熱く語っていたことを思い出した。

2005年、ウラジオストクにおける博物館交流

－ふたたびウラジオストクで新しい函館を紹介する－

2005年7月1日、ウラジオストク市の建都145周年を記念して、「ウラジオストク友好親善の翼文化交流団」函館市民113名が参加し、一路ウラジオストクへ飛んだ。

この絶好の機会にあわせるかのように、函館博物館も博物館姉妹提携以来の博物館交流として7月3日から6日までの期間、3年ぶりに「芸術の祭典、第4回ウラジオストク・ビエンナーレ」に参加した。ビエンナーレ博物館プログラム「時代と間隔の交差点ーウラジオストク」に組み込まれた函館博物館・アルセニエフ博物館企画の企画展「新しい函館そして交流の形」は、ウラジオストク市の沿海地方国立アルセニエフ博物館において開催され、多くのウラジオストク市民をはじめ沿海地方や日本各地の参加者で大いに賑わった。企画展「新しい函館そして交流の形」では、2004年12月1日、平成の大合併となった函館、戸井、南茅部、恵山、榎法華の各地域の自然と景観、南茅部地域を中心とする考古資料のパネル展示をはじめ、『函館市史』、『地域史研究はこだて』などによる「書籍類に見る交流関係」コーナーや「函館市の観光ポスター」コーナーなどで新しい函館の顔を広くウラジオストク市民に紹介した。また、展覧会では、交流団参加メンバーの函館日ロ交流史研究会の展示コーナー「函館にみるロシアの面影」等、民間団体との連携による企画、展示を展開することができた。

さらに、滞在期間中開催されたアルセニエフ博物館が管轄する沿海地方の博物館が集う「博物館円卓会議」では、各博物館の活動報告や諸問題について討議がなされ、それぞれの博物館と意見の交換を行った。滞在期間中訪れた極東大学附属博物館の2階にある日本センターでは、戦前東京の神田ニコライ堂神学校を拠点に柔道を修練し、ウラジオストクをはじめロシア各地で柔道の指導にあたった柔道家オシエーブコフにまつわる柔道の展覧会を開催していた。案内してくれたセンター職員のオリガ女史は、流暢な日本語で「この展覧会は、函館と非常に関係があります。」と、昨年博物館交流でアルセニエフ博物館職員と同行した女史が、来函の際に訪れた函館近隣にある福島町の横綱千代の山・千代の富士記念館の印象からヒントを得てこの展覧会を企画したことを語った。改めて相互交流の成果が多様なかたちとなって実現し、多くの市民に受け入れられていることを実感した。

また、滞在期間、ウラジオストク市内を走る路面電車の中でもひととき目立つ噂の「博物館路面電車ーウラジオストク発函館行きー」が往来していた。博物館路面電車は、2004年にロシアのすべての博物館を対象としてロシア文化省ポターニン慈善基金が主催した「変化する世界における変化する博物館」のコンテストのうちの「博物館と新しい教育のためのプログラム」部門でルスナク・スベトラーナ研究員を中心としたアルセニエフ博物館、ロシア極東国立工科大学、市立函館博物館の三者共同プロジェクトによる「博物館路面電車 函館ーウラジオストク」を提案し、見事グランプリを獲得した企画によるものであった。ウラジオストク市内を走る路面電車を博物館に見立て、ウラジオストク市関連の写真や函館博物館がアルセニエフ博物館で展覧会を開催した時の写真パネルを車内に展示し、走る博物館路面電車に特別仕立てにしたわけである。ルスナク女史がかつて博物館交流のために来函した際に見た、函館冬フェスティバルの電飾された花電車に感動した証として、ウラジオストク発函館行きの博物館路面電車がまばゆいばかりのイルミネーションを放ちながら夜のウラジオストク市街をガタゴト走っていた。

滞在中、ルスナク女史からは是非とも博物館路面電車に乗るように勧められながらも、図らずも夢のウラジオストク発函館行きの博物館路面電車に乗り遅れてしまった、たったひとつの心残りを胸に秘めながら5日目の帰路についた。

2006年、新たな博物館交流と日ロ文化交流のかたち

—広がる博物館交流の輪—

2006年6月5日、アルセニエフ博物館から函館博物館に姉妹博物館の一層の発展を期待するメッセージとともに、博物館姉妹提携とこれまでの博物館交流に尽力されたアレクシユク・ガリーナ館長が勇退され、新たにソコロフ・ウラジーミル館長、ルスナク・スペトラーナ副館長が就任した旨のファックスが届いた。新館長、副館長になられた両人は、実は博物館交流、博物館姉妹提携の立役者でもあったので今後の相互博物館交流に一層弾みがつくものと大いに期待した。

そんな中、2006年11月9日、元アルセニエフ博物館副館長で現在ウラジオストク市にある海洋国立大学東アジア学部で教鞭をとる傍ら、ウラジオストク日本センターの日本文化同好会メンバーでもあるクリコヴァ・ユリヤ女史が来函した。女史は、国際交流基金の研修生として来日し、「極東ロシアと日本の文化交流」をテーマに研修に臨みその成果をまとめ、今後の日ロ文化交流に役立てる目的での来日であった。研修カリキュラムに組み込まれた国内研修は、博物館交流や日ロ文化交流の活発な札幌、函館を研修先に選んでの1週間にわたる来道となったわけである。かつて、博物館マネジメントのスペシャリストとしてアルセニエフ博物館で重責を担い活躍されてきた女史の函館での研修は、11月6日からの札幌、北海道大学スラブ研究センター、北海道北方博物館交流協会への訪問、調査に引き続いてのもので、函館博物館では学芸員と博物館交流や専門分野におよんで意見交換を行い、当地の民間団体函館日ロ交流史研究会との交流会では「極東ロシアと日本の文化交流」についての報告や情報交換を行った。また、クリコヴァ・ユリヤ女史にとってロシア極東大学函館校主催のロシアまつりへの参加など現在の函館とロシア、ウラジオストク市との関わりを実感することになったはじめての函館訪問の3日間は、旧ロシア領事館やハリストス正教会にみるロシアの面影をまのあたりにしながら、函館の幅広い博物館交流、文化交流の現状に触れてもらう絶好の機会でもあった。クリコヴァ・ユリヤ女史との函館研修でのめぐり合いにより、国際交流の輪が函館からまたひとつ大きな輪に広がったことを喜ぶとともに、函館とロシア、ウラジオストクとの相互交流における継続されるべき新たな博物館交流のかたちを観た。

2007年、博物館姉妹提携5周年

—函館で博物館交流5年を振り返る—

2007年7月28日、市立函館博物館と沿海地方国立アルセニエフ博物館との間において博物館姉妹提携が結ばれてからちょうど5年目を迎えた。前年の姉妹博物館であるアルセニエフ博物館の館長、副館長の交代など、変わらない博物館交流の原点を据えながら世代交代を含め新しい交流のかたちを形成しつつある5年目である。このような博物館姉妹提携の5周年を記念して、函館市中央図書館ロビーを会場に7月24日から31日までの一週間、函館市民とそして沿海地方国立アルセニエフ博物館と分かち合うささやかな「博物館交流5年の歩み」の写真パネル展を開催し、多くの市民をはじめ関係者の観覧に供した。展覧会では、函館市企画部国際課等の協力を得て、函館市・ウラジオストク市姉妹都市提携15周年記念「交流の軌跡」も紹介した。

博物館交流から5年、国際文化交流の一翼を担うべく手探りの博物館交流もウラジオストク市

民、函館市民の理解を得ながらアルセニエフ博物館との相互の展覧会や刊行物の交換、博物館情報の共有など着実に成果をあげてきた。5年目を迎える交流の軌跡が今後とも刊行物、情報の交換、共同企画案に基づく展覧会、シンポジウムの開催、専門分野における共同研究の実施など互いに背伸びせず実現可能な交流事業から着手していこうという基本的な考え方にたった息の長い博物館交流であらん事を願ってやまない。そして、函館、ウラジオストクの歴史、文化を理解するためのこれまでの展覧会等の実績を踏まえ、博物館活動の要である実質的な共同の調査・研究や研究論文発表の実現が待たれる。わずかな情報交換や調査・研究の共有でもその実践と蓄積がいずれは、相互の市民のための計画的な展覧会やシンポジウムに結びつけられればこの上もない交流の成果となるわけである。また、このようなアカデミックな交流のほか、両市民を取り込んだ函館、ウラジオストクを舞台とした国際的な視点にたった体験型博物館相互交流の具体的な有りようも魅力的であり、今後一層のロシア極東国立総合大学函館校、日本センター附属日本文化同好会、函館日口交流史研究会、函館日口親善協会等の関係機関との連携も欠かせない。

結びにかえて

—地域とひとを繋ぐ博物館交流—

2002年7月の「市立函館博物館と沿海地方国立アルセニエフ博物館の姉妹提携について」の調印において、博物館交流の発展を図るため、相互協力により交流事業を推進するとして、第1に博物館資料および活動に関する刊行物、情報の交換、専門分野における共同の調査・研究、共同企画提案による展覧会、シンポジウム等の開催が約束されたことは周知のとおりである。

近年、このような調印の趣旨、内容に基づいた両姉妹博物館のありようを試すかのように博物館交流の実践事例として2000年と2007年に函館博物館、函館市中央図書館で2枚の拓本が相次いで発見された。拓本の発見に関わり、アルセニエフ博物館との博物館交流が、ウラジオストク訪問等での石碑存在の確認をもたらすなど、拓本発見の大きな足がかりとなった。発見された2枚の拓本は、北東アジア史を物語る1413年建立の「永寧寺記碑」、1433年建立の「重建永寧寺記碑」の碑文で、そこには、15世紀初頭の明朝、永楽帝の時代に黒龍江下流域ティルにヌルガン都司を置き地域一帯を支配し施策を講じた様子が刻まれている。国内における永寧寺碑拓本の発見は、京都大学人文科学研究所所蔵資料に次ぐもので、採拓時期が世界に現存する最も古い拓本であることが判明し、碑文解明等画期的な発見となった。

そして、姉妹博物館であるアルセニエフ博物館の絶大なる協力を得て、北東アジア研究の第一人者北海道大学菊池俊彦教授（現名誉教授）を代表とする研究プロジェクト「中世の東北アジアと考古学—奴兒干永寧寺をめぐる東北アジアの文化交流と諸民族の動向」と結びつき、ウラジオストク市における石碑画像解析調査、第7回ヤンコフスキー研究会での報告、ティルにおける考古学調査、函館における研究フォーラム「ヌルガン永寧寺と北東アジアの交流」等が展開され、北東アジア史研究に新たな1ページを加えることとなった。言うまでもなく、永寧寺碑拓本の発見が紙面を賑わし、函館市民、ウラジオストク市民の間でも大いに話題となった。現在、永寧寺の石碑本体は北東アジア史を知る第1級の歴史資料として、沿海地方国立アルセニエフ博物館本館展示室と国際展示センターの前庭に収められている。

博物館活動の真骨頂である学術調査、研究を中心とする博物館交流の成果とも言うべきこのよ

うな事例が示すとおり、5年目を迎えた博物館交流そのものが、これからも共有できる両地域の歴史的、文化的情報を検証し、広く一般に使える情報として集積、発信される拠点を形成しながらこれまで互いの歴史、文化を育んできた地域やひとを繋ぐ永遠の知的タイムマシンであり続けたい。継続は、力なり。

(市立函館博物館 館長)

謝 辞

本研究紀要の執筆にあたり、北海道大学名誉教授菊池俊彦氏、函館工業高等専門学校教授中村和之氏には、掲載写真の快諾と貴重なヌルガン永寧寺に関わる調査、研究等の情報を提供していただいた。心よりお礼申し上げます。また、これまでの博物館交流において、姉妹博物館である沿海地方国立アルセニエフ博物館とその傘下の博物館はもとより、函館とロシア、ウラジオストクとの文化交流の架け橋となりながら、ウラジオストクをはじめとする北東アジアの数多くの情報提供と適切な指導、助言、協力をいただいた函館日ロ交流史研究会、函館日ロ親善協会、ロシア極東国立総合大学東洋学部、ロシア極東国立総合大学函館校、ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古・民族学研究所、ウラジオストク日本センター附属日本文化同好会、財団法人北海道北方博物館交流協会、函館市企画部国際課等々すべての関係諸氏に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 「今ふたたびのウラジオストク」長谷部一弘 ウラジオストク訪問記2005. 7. 1～7. 5 ウラジオストク建都145周年記念公式訪問函館日ロ交流史研究会・文化交流団報告書 函館日ロ交流史研究会 2005. 10発行
- 「沿海地方国立アルセニエフ博物館との姉妹提携ー新たな博物館交流ー」長谷部一弘 市立函館博物館報サラニップNo.42 市立函館博物館 2003. 3. 31発行
- 「沿海地方国立アルセニエフ博物館との姉妹提携2 ウラジオストクだより」佐野幸治 長谷部一弘 市立函館博物館報サラニップNo.43 市立函館博物館 2004. 3. 31発行
- 「沿海地方国立アルセニエフ博物館との姉妹提携3 2004年度沿海地方国立アルセニエフ博物館・市立函館博物館姉妹提携2周年記念企画展報告」中村公直 市立函館博物館報サラニップNo.44 市立函館博物館 2005. 3. 31発行
- 「「新発見の重建永寧寺碑」拓本をめぐって」中村和之 函館日ロ交流史研究会会報No.23 函館日ロ交流史研究会 2003. 7. 1発行
- 「第4回ウラジオストク・ピエンナーレービジュアル・アート・フェスティバル」プログラム ウラジオストク市行政府／沿海地方文化省／アルセニエフ記念沿海地方国立博物館／国立極東芸術大学／露日協会沿海地方支部／東洋文化学習センター 2005. 6発行
- 「日本センター附属日本文化同好会案内」日本センター 2005発行
- 「ヌルガン永寧寺と北東アジアの交流」研究フォーラム資料集 特別研究促進費「中世の東北アジアと考古学ー奴児干永寧寺をめぐる東北アジアの文化交流と諸民族の動向」(研究代表・北海道大学 菊池俊彦) 2007. 10発行
- 「博物館交流と日ロ交流展覧会ー国立アルセニエフ博物館にてー」佐野幸治 函館日ロ交流史研究会会報No.28 函館日ロ交流史研究会 2006. 5. 1発行
- 「函館とウラジオストクとの新たな交流ー文化・学術交流・はじめての一步ー」長谷部一弘 函館日ロ交流史研究会会報No.26 函館日ロ交流史研究会 2004. 9. 10発行
- 「函館とウラジオストクー博物館交流、はじめての一步から5年ー」長谷部一弘 日刊政経2007年・夏季特集号 日刊政経情報社 2007. 8. 1発行
- 「V・Kアルセニエフーロシア沿海州探検とデルス・ウザーラー」V・Kアルセニエフ展実行委員会、財団法人北海道北方博物館交流協会 2003. 7. 25発行
- Арте́мьев А. Р. Буддийские Храмы XVв. В Низовьях Амура, Владивосток, 2005.
- Журнал-проект <<37-я странагема>>. Владивосток, 2005 No.1 (4)

函館・ロシア 交流の歩み

- 1793年 ロシア使節ラクスマン、エカテリーナ号で箱館に入港。
(外国船の箱館初入港) 大黒屋光太夫、磯吉帰還。
- 1799年 高田屋嘉兵衛、エトロフ航路を開く。
- 1811年 ディアナ号艦長ゴロヴニン、箱館に到着。福山に護送。
- 1812年 高田屋嘉兵衛、カムチャツカに連行。
- 1813年 高田屋嘉兵衛釈放、ゴロヴニン、釈放帰国。
- 1853年 プチャーチン艦隊、長崎入港。国境の確定と開港を要求。
- 1854年 ロシア使節プチャーチン、箱館来航。日露和親条約に調印。
- 1857年 ゴシケーヴィチ、橋耕斎著「和魯通言比考」のロシア出版。
- 1858年 箱館初代ロシア領事ゴシケーヴィチ着任。
亀田にロシア病院設置。
- 1859年 箱館、神奈川・長崎と共に開港場となる。
- 1860年 ロシア領事館竣工。隣にハリストス聖堂を建立。
植物学者マキシモヴィチ、箱館周辺の植物を採取。
ウラジオストク、海軍基地として開かれる。
- 1861年 司祭ニコライ、箱館着任。
司祭マホフ、「ろしやのいろは」を作成。ロシア病院火災で焼失。
- 1863年 領事館隣にロシア病院竣工。
- 1865年 大町居留地にロシアホテル開業。
幕府のロシア留学生、箱館より出航。
- 1866年 ロシア領事らより写真術を学んだ木津幸吉、写真屋開業。
- 1872年 函館学校にロシア語科併設。
ロシア親王アレクサンドロヴィチ来港。
- 1873年 サルトフ、開拓使露語教師として官立函館学校の教師となる。
(同年、官立露学校と改称)
- 1874年 榎本武揚、特命全権公使としてロシア公使館に赴任。
- 1875年 樺太・千島交換条約締結調印。
- 1878年 開拓使長官黒田清隆、ウラジオストクを視察。
- 1886年 会所町に函館露語学校創設。
- 1896年 ウラジオストク、新潟間の航路開設(函館寄港)。
- 1898年 函館尋常中学商業専修科、ロシア語教授開始。
- 1902年 シベリア鉄道開通。
- 1903年 民俗学者ピウスツキー、アイヌ民族調査のため来函。
- 1904年 日露戦争勃発。ロシア領事引き揚げ。
ロシア浦塩艦隊津軽海峡を航行、函館市民動揺。
- 1905年 日露講和条約調印。南樺太日本領有となる。
- 1907年 函館大火により、領事館、正教会を焼失。
日露漁業協約調印。
函館デンビー商会設立。
- 1908年 函館商業学校学生、商工業調査のためウラジオストク訪問。

- 1912年 ニコライフスク市より観光団来函。
この頃、銭亀沢村に旧教徒ロシア人一行入植。
- 1916年 ロシア婦人の献金により正教会聖堂の再建なる。
- 1917年 ソビエト政権樹立。
- 1918年 シベリア出兵。
探検家アルセニエフ、カムチャツカ調査に際し来函。
- 1920年 尼港事件発生。北樺太保障占領開始。
- 1921年 日魯漁業株式会社発足。軍艦護衛で北洋へ出漁。
この頃より、元町にロシア人住み着く。(ロシア長屋)
- 1925年 函館ソ連領事館再開。
- 1926年 函館市主催露国展覧会開催。
- 1928年 日ソ漁業条約締結。
白系ロシア人アルハンゲリスキー、ロシア語新聞発刊。
- 1930年 A・Gデンビー、函館市より産業功労者として表彰うける。
- 1941年 第二次世界大戦勃発。日本、英米に宣戦布告。日ソ中立条約成立。
デンビーら国外脱出。
- 1945年 終戦。日本、ポツダム宣言受諾。
- 1955年 戦後初の西カムチャツカ出漁船団函館出港。
- 1989年 函館市日ソ親善協会設立。
- 1992年 函館市、ウラジオストク市姉妹都市提携調印。
函館日ロ交流史研究会発足。
- 1994年 ロシア極東国立総合大学函館校開学
- 1997年 函館市、ユジノサハリンスク市姉妹都市提携調印。
- 2002年 市立函館博物館と沿海地方国立アルセニエフ博物館、
姉妹博物館提携調印。於函館市青少年研修センター
- 2003年 博物館姉妹博物館提携1周年記念展覧会
「函館とウラジオストクー歴史的関係と協力の経験ー」開催、
於ウラジオストク・アルセニエフ博物館。
- 2004年 博物館姉妹博物館提携2周年記念展覧会
「函館とウラジオストクー歴史、文化の経験ー」開催、
於函館市芸術ホールギャラリー。
- 2005年 ウラジオストク市建都145周年記念
「ウラジオストク友好親善の翼」、ウラジオストク市を訪問。
博物館交流展覧会「新しい函館そして交流の形」開催、
於ウラジオストク・アルセニエフ博物館。
- 2007年 市立函館博物館、沿海地方国立アルセニエフ博物館
姉妹博物館提携5周年記念写真パネル展、於函館市中央図書館。



2002年7月28日に執り行われた博物館姉妹交流の調印式
「北海道・東北史研究会シンポジウム 函館シンポジウムII」



調印式後に行われた記念講演
「函館ーウラジオストク：歴史的関係と協力の展望」

アルセニエフ博物館で開催された1周年記念展覧会
「函館とウラジオストクー歴史的関係と協力の経験ー」

2003 ウラジオストク



アルセニエフ博物館スタッフと



展示作業中の函館博物館スタッフ



沿海地方国立アルセニエフ博物館全景



1周年記念展覧会の開会式



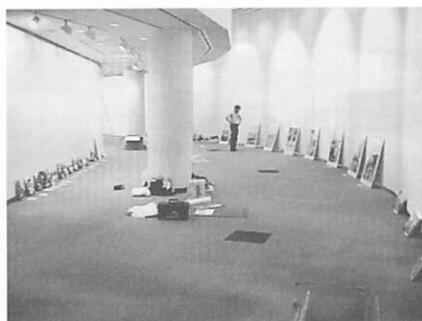
沿海地方の博物館が一堂に会した博物館円卓会議

2004 函館

企画展「函館とウラジオストク—歴史、文化の経験」



市立函館博物館とアルセニエフ博物館スタッフによる展示作業



展示会場と作品のレイアウト



オープニングセレモニー、テープカットで祝う



バプツェヴァ・イライダ女史の説明を受ける西尾助役(現函館市長)

観覧者でにぎわう会場



一路ウラジオストクへ



アルセニエフ博物館の見学



ロシア極東国立総合大学
東洋学部への訪問



企画展「新しい函館そして交流の形」展示会場
日本センター附属日本文化同好会との交流



アルセニエフ博物館
での歓迎レセプション

左上：浦塩本願寺跡
左下：建都145周年に湧く市内
中央：「旧デンビー商会の建物」
を観る

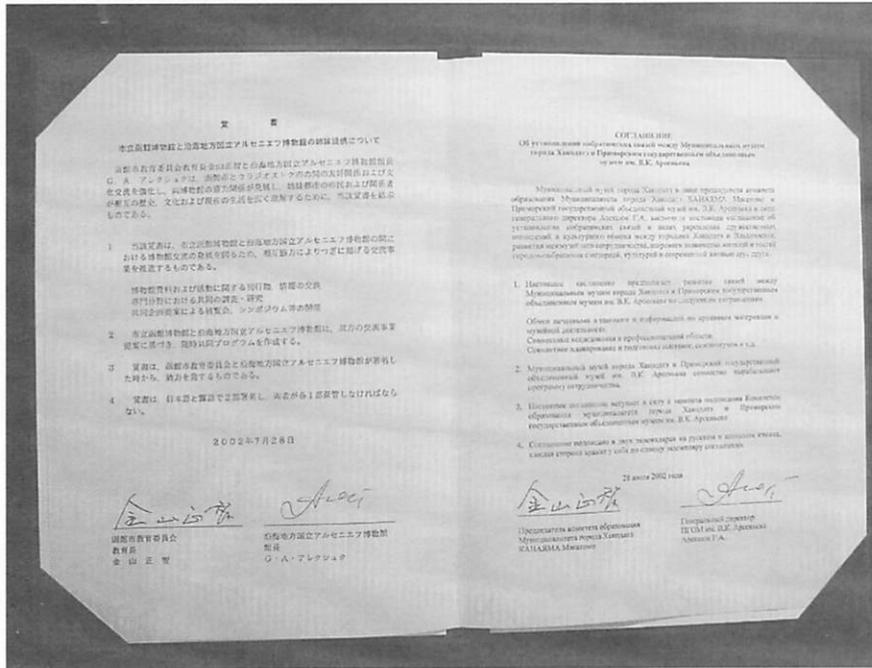
建都145周年を迎えたウラジオストク市内

2005 函館

市立函館博物館にウラジオストク市と
アルセニエフ博物館展示コーナー開設



市立函館博物館本館ロビーの展示コーナー



2002年に取り交わされた姉妹博物館の調印書



ウラジオストク市の歴史・
自然・地理の紹介



調印書や記念に贈られた
ロシアの鐘（カラコーリ
チック）を展示

新たな博物館交流のかたち

2006・2007 函館



海洋国立大学東アジア学部クリコヴァ・ユリヤ女史と学芸員との意見交換

函館日口交流史研究会会員
との意見交換



博物館姉妹提携5周年を記念して開催された
写真パネル展「博物館交流の軌跡」



展示準備風景

研究プロジェクト
「中世の東北アジアと考古学」との共同研究

2005-2007 ウラジオストク



アルセニエフ博物館国際展示センター



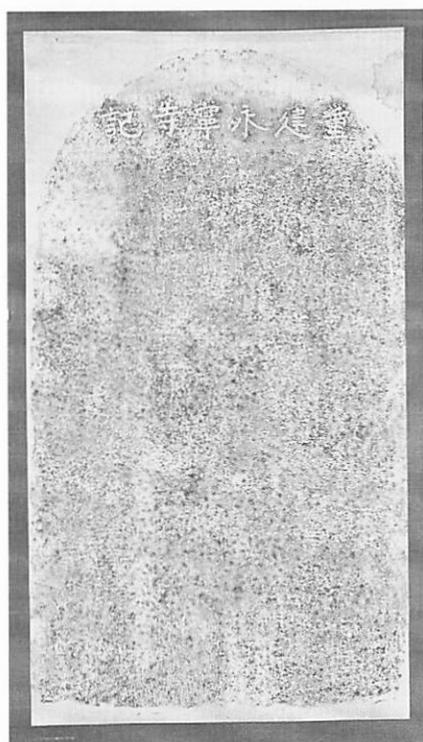
国際展示センター前庭の「重建永寧寺碑」



2005国際展示センター前庭での
石碑画像解析調査



2005アルセニエフ博物館本館展示室での
「永寧寺碑」画像解析調査

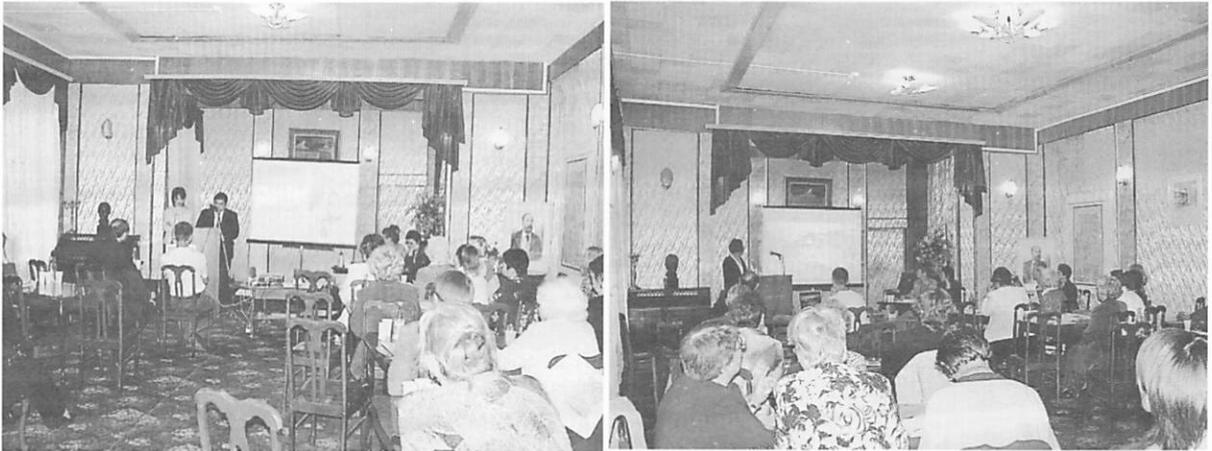


左：2000年に発見された
「重建永寧寺碑文」拓本

右：2007年に発見された
「永寧寺碑文」拓本

ヤンコフスキー研究会

2006 ウラジオストク



2006 アルセニエフ博物館で開催された「第7回ヤンコフスキー研究会」での研究発表
会場右壁面に函館博物館で発見された「重建永寧寺碑拓本」を紹介

ヌルガン永寧寺研究フォーラム

2007 函館



研究フォーラム会場で「重建永寧寺碑拓本」
に見入る参加者たち



函館市産学官交流プラザで開催された
ヌルガン永寧寺研究フォーラム



市立函館博物館 研究紀要 第18号

2008年3月31日 発行

編集・発行 市立函館博物館

〒040-0044 函館市青柳町17-1 (函館公園内)

TEL 0138-23-5480 FAX 0138-23-0831

印刷 有限会社 畠山印刷

〒041-0812 函館市昭和3丁目12番15号

TEL 0138-42-3835 FAX 0138-41-9702

BULLETIN
OF
HAKODATE CITY MUSEUM

No. 18

C O N T E N T S

Preface

TADASHI KAWAI, KAZUYOSHI NAKATA : “Information of natural
history on freshwater crayfish in Hakodate City
and around areas, Southern Hokkaido, Japan”

KAZUHIRO HASEBE : “The New Cultural Exchange between
Hakodate and Vladivostok”
-Museum Exchanges, 5years from the first step-

2008

Publisher: Hakodate City Museum

17-1, Aoyagi-cho, Hakodate, Hokkaido, Japan 040-0044

Phone. 0138-23-5480 Fax. 0138-23-0831